

復活日

2011/4/24

聖ヨハネによる福音書第20章1～18節  
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

皆さん、イースターおめでとうございます。

イースターは、キリスト教の最大のお祭りです。クリスマスよりも大きなお祭りです。イースターがなければ、キリスト教の信仰は成り立つことはありません。教会が日曜日ごとに礼拝を捧げるのは、日曜日の朝早くに、イエスさまがお甦りになったからです。イエスさまのご復活を祝うために、教会は日曜日ごとに集まって、感謝と賛美の礼拝を捧げているのです。

そのようにイースターが一番大切なお祭りなのですが、日本の社会の中では、今日がイースターであることを知っている人は、まだまだ多くはないでしょう。それは、イースターがクリスマスのように、毎年、同じ日にやってくるのではないことも、一つの理由だと思います。

クリスマスは、12月25日に決まってお祝いをしますが、イースターはその年によって日にちが変わります。一番早い3月22日から、最も遅い4月25日の間に祝われます。去年は4月の4日でしたが、今年は4月24日と、ほぼ一番遅いイースターになっています。これは3月21日以降の満月の後の最初の主日を復活日と定めると、4世紀のニケア公会議で決められたためです(祈祷書1頁)。ですから、今年のイースターはいつなのか、余程の関心のある人でなければ、知らないうちに過ぎていってしまうことになるでしょう。

昨日、教会の周りの何軒かのお家には、卵を配ってイースターのご挨拶をしましたので、教会の近くの人たちは、今日がイースターなのだということが分かっていただけだと思います。

ところで、わたしの前任の聖マーガレット教会の日曜学校では、毎年、イースターカードを他の教会の日曜学校と交換しています。今年も送られてきました。また、わたしが管理牧師をしております東京聖マリア教会では、同じ名前をいただく全国のマリア教会に、毎年、クリスマスとイースターにはカードを送って祝意を表しています。カードに託してイエスさまのご復活の喜びと感謝を分かち合っています。皆さんもクリスマスには、クリスマ

スカードを親しい方に送ったりすると思います。でも、イースターにカードを交換する習慣は、まだ、なかなか定着してはいないと思います。わたしも、クリスマスには沢山のカードを書きますが、イースターにはほんの僅かな枚数しか書きません。それでも何枚かは用意しました。カードにどのような言葉を書こうかと、いつも頭を悩ますのですが、以前に求めたあるカードには、「告げ知らせよう人々に、キリストの復活を、アレルヤ」という言葉が印刷されていました。

キリストの復活を告げ知らせる、それは何を伝えることなのでしょう。ただ、今日が今年の復活日ですよと、日にちを教えるだけのことではないことは明らかだと思います。イエスさまのお甦りを伝えるということは、その出来事によって、わたしたちがどのような喜びに包まれるのか、ということを知らせることでしょう。

今日の福音書では、ペトロともう一人の弟子は、イエスさまのお墓が空っぽになっているのを確かめても、「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった」書かれていました。一度、死んだ人間が甦るなどということは、そんなことが起こるわけがないと思う。それが常識です。だから、2人とも、そのあと、誰にも何も言わないで自分の家に帰ってしまいました。復活したイエスさまに出会うまでは、何が起こったのか、分からなかったのです。

復活したイエスさまに、最初に出会ったのは、マグダラのマリアという女性の弟子でした。マグダラのマリアはイエスさまに出会ったときに、イエスさまにすがりついて、もう2度と離すまいとしたのです。それだけイエスさまと再び出会うことができたことを大きな喜びと感じたのです。そして、イエスさまに言われたとおりに、他の弟子たちのところに行って、「わたしは主を見ました」と告げました。喜びで一杯だったことでしょう。

先程、カードの話をしました。そのカードの絵は、3人の女性が手に手に水瓶を持って何かを話しながら草の上を走って行く絵です。向かう先は、雲の上に朝日が日の光を輝かせている、その光を目指しているようです。イエスさまのご復活は、わたしたちの心を覆っている雲を晴らして、光が輝き出す出来事だということを表しているのでしょう。そして、渇いた心を再び潤し、元気を沸き上がらせてくれる清らかな水を、瓶に一杯汲むことができる喜びの出来事だ、それがイエスさまのご復活だと言おうとしているように思えます。

今年の大齋節は、3月9日の灰の水曜日から始まりました。そしてその2日後の3月11日に大地震が発生し、それに津波が襲うという、未曾有の震災に東日本は見舞われました。更に福島原子力発電所の事故によって、多くの方々が避難生活を余儀なくされています。亡くなった方は4月22日現在、確認された人数が1万4159人に上っています。警察に届け出のあった行方不明の方々と合わせると、2万7328人とされています。

突然の予期せぬ災害に遭遇し、生き延びることのできた人々も精神的、肉体的に大きな衝撃を受けたことでしょう。また家や生活の手段を奪われて、見通しの立たないまま、未だ呆然としておられる方々も少なくないと思います。なぜ、このような不幸な目に会わなければならないのか。一体、自分が何をしたと言うのかと、問わざるを得ないのではないでしょうか。イエスさまの十字架上の御言葉のように、「我が神、わが神、なんぞ我を見捨て給ひし」と叫ばざるを得ない、辛い思いの中に沈んでおられるかもしれません。

或いは、その災害を試練として受け止め、信仰の強さが試されていると理解した方もあるかもしれません。この出来事を通して、神さまは何を教えようとしているのかと、御心を尋ねようとする方もあるかもしれません。

しかし、そのような問に対して、誰もが納得のゆく答えを見つけることは難しいことです。ことに被害に遭われた当事者にとっては、何らかの答えがあったとしても、それに心から同意ができて、明日から明るい日を迎えることができるようになるとは、到底、考えられないのではないでしょうか。

わたしたちの人生には、答えの得られない出来事が起こるのです。その出来事について、それが自分の身に起きた理由や原因を説明し尽くせるならば、人生は人が生きていくのに生き易いものとなるでしょう。それで納得がいくのですから。ところが、答えが見つからない、納得できない、それがわたしたちの人生の中でしばしば起こる不条理ではないでしょうか。理不尽な状態に怒りを感じ、他人の幸せそうな姿を妬ましく思えるのです。神さまの正義と公平に不信を抱くことにもなるのです。

復活のイエスさまと最初にであったマグダラのマリアも、この不条理に直面したと思います。自分の癒し難い重い心の病をイエスさまによって癒され、イエスさまについて行くことだけが、マリアの人生のすべてとなったのです。そのイエスさまが十字架の上で、しかも悲惨な死を遂げてしまわれた。マリアにとっては、彼女の人生のすべてが奪い取ら

れてしまったことです。この後、どのようにして生きていったら良いのか、皆目、見通しの無い闇の中に放り込まれてしまったのです。重い墓石の前に座って、自分の人生が再び無に帰してしまおうとする不幸を嘆き、その原因を問い、理由を求め、そこに自らを慰める材料を得ようと涙の中で思案を巡らしたことでしょう。

しかし、墓石は何も答えてはくれないのです。そこには何の答えもないのです。ところが、答えは思いがけない方向から訪れるのです。過ぎ去った過去の中に求めるのではなく、方向を改めなければなりません。振り返ったところ、そこにイエスさまがおられるのです。過去に目を留め続けるのではなく、未来に目を向けることがなすべきことなのです。復活のイエスさまとの出会いは、過去から未来へと、わたしたちの姿勢を180度、転換させてくださる力を与えられることです。

自然の法則を超えて奇跡を求めても、一旦、起こったことをくつがえせるわけではありません。絶望的な状況に神さまが登場し、一気に解決を与えて下さることを待ち望んでも、沈黙しか与えられません。病状の好転を求めても、それがどれほど真剣な祈りであったとしてお、いつも祈りが答えられるわけではありません。

苦しみや困難は、わたしたちが人生を歩んでいる限り、その大小や強弱はあったとしても、必ず伴ってくるのです。それを取り去ってくださいと、わたしたちは願うのではありません。そうではなくて、そこで孤独感を感じたり恐れや嘆きに支配されたとしても、わたしたちは一人で戦っているのではないということを知ること、知らされること、そこに神さまとの出会いがあるのです。恐れや嘆きを、わたしたちの傍らにあって共に担ってくださる方がおられることを見出だすことが信仰です。

イエスさまは十字架に掛かり、苦難をご自分のものとしてくださいました。それはわたしたちが苦難の中にある時、その呻きを理解し分かち合ってくださいるためです。ご自分が苦しみを体験されたからこそ、「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言って、わたしたちが困難な状況にあっても、それを担って行く勇気と力を与えようとしてくださるのです。問題がなくなるようにと祈るのではありません。それらに直面しながら、生き抜いて行く力を求めるのです。復活の主との出会いは、その新たな力、忍耐と希望が与えられる出来事です。

今日は、この礼拝の後、聖歌隊の皆さんのご提案で、今回の大震災で被災された方々を覚えて聖歌を一曲、一緒に歌います。素晴らしいご提案をしてくださったことに感謝しています。困難にもめげることなく、乗り切る力が与えられるよう、祈りを込めて歌いたいと思います。477番を選びました。宮崎光司祭の作詞になる聖歌です。各節の終わりに、「神よ 力を 生きる力を」「神よ みわざを 生きる勇気を」「神よ 光を 生きる希望を」と歌います。与えられた人生に対して、前向きに向かって行こうとする人の姿勢が歌われていると思います。これは教会の証です。主の復活の力に生かされた人の証です。わたしたちも同じ信仰に生きる者でありたいと思います。